テサロニケ人への前の書

大正訳

○テサロニケ前書、使徒ポウロの四大書翰とはロマ書、コリント前書、同後書、加拉太（ガラテヤ）書である。テサロニケ書は、ポウロの書いた書翰中最も古いものである。前の四大書翰に之を加へてポウロの第一時代の作とし、其他を第二時代の作とする。囚捕の前後を以て区別するのである。後者は調和と円熟、前者は純粋と熱誠。新約全書全体のうちに於ても、此テサロニケ書は最も古いものである。ヤコブ書及ガラテヤ書を最も古いと云ふ説もあるが、テサロニケ書が最も古く、紀元五十年おそくも五十三年に記されたもので、原始的基督教の馨香が高いのである。コリントにて書いたものである。

○ポウロは第一回の傳道旅行を終へて、アンテオケに帰り止まること旬日にして、第二の傳道旅行に出たが、不幸バルナバと意見合はず、シラス（シルワノ）を伴って出立した。（徒一五36以下）途中同伴者にテモテを加へ（徒一六1）遂にマケドニヤに至り、福音の宣傳の欧州大陸に進入した。それよりピリピをすぎてマケドニヤの首府テサロニケに至った。少數の信者は起ったが、ユダヤ人に妬まれて其処をのがれ、遂にコリントに至った。ポウロはコリントに在りて、テサロニケの信者達のことを心配し、其様子を見るべくテモテを遣した。テモテはテサロニケにいたりて兄弟たちにあひ、又其書翰をもたらしてポウロに返った。ポウロは直に書を認めてテサロニケに送ったのである。其目的は、迫害中にある少數の信者を慰め且つ勵まさん爲めであった。原始的（紀元五十年頃の）信者の有様が躍如として居る。

〇新約全書二十七巻中最も古い書である。ポウロ時に五十二、三才。

第一章

1 ［一パウロ、シルワノ、テモテ、書を父なる神および主イエス・キリストにあるテサロニケ人の教會に贈る。願はくは恩惠と平安と汝らに在らんことを。］

［主イエスキリストにある］○主イエスキリストと常に倶にある。

3 ［三これ汝らが信仰のはたらき、愛の勞苦、主イエス・キリストに對する望の忍耐を、我らの父なる神の前に絶えず念ふに因りてなり。］

○信仰と希望と愛とは、ポウロの常に力説せる所である。（撒前五8、哥前一三）大多数は自己のためにはたらき、自己の爲に勞苦し、自己の爲に忍耐して居る。テサロニケの信者は皆之を体験して居た。肉につける人を靈につける者に変じたる、原始的基督教は偉大なるものであった。

○信仰は善行の基礎にして、善行は活ける信仰の証拠なり（約三16）。

○ポウロはテサロニケよりシラス、テモテと共にベレアに来り、ポウロは一人さきにアテンスに行き、シラスはベレアに止まり、テモテはテサロニケに返りて、其地の信者をはげまし、再びベレアに帰り、シラスを伴ひ、ポウロのあとを追ってアテンスにいたりたるに、ポウロはすでにコリントにいたりたれば、更にコリントに至りたるなるべし。（徒一八）

4 ［四神に愛せらるる兄弟よ、また汝らの選ばれたることを知るに因りてなり。］

○「愛せらる」「選ばる」と云ふ以て、テサロニケの信者が熱誠なる信者なりしことを知るに足る。眞の信者ら

しき信者であった。而してイエス及ポウロ等と同じく聖靈に醉ふ者となった。特殊の苦みと特殊の喜とは、眞の信者の附属物である。理想的の信者。

5 ［五それ我らの福音の汝らに至りしは、言にのみ由らず、能力と聖靈と大なる確信とに由れり。且われらが汝らの中にありて汝らの爲に如何なる行爲をなししかは、汝らの知る所なり。］

［確信とに由れり］○而してテサロニケの信者も。まことの確信に達せり。

8 ［八それは主のことば汝等より出でて、啻にマケドニヤ及びアカヤに響きしのみならず、神に對する汝らの信仰のことは諸方に弘りたるなり。されば之に就きては何をも語るに及ばず。］

［汝等］○アシヤ

［アカヤ］○アカヤはマケドニヤの南

9～10 ［九人々親しく我らが汝らの中に入りし状を告げ、また汝らが偶像を棄てて神に歸し、活ける眞の神に事へ、一〇神の死人の中より甦へらせ給ひし御子、すなはち我らを來らんとする怒より救ひ出すイエスの、天より降りたまふを待ち望むことを告ぐればなり。］

○再臨と審判と赦免。これポウロの傳へし福音の眞髄である。

10 ［一〇神の死人の中より甦へらせ給ひし御子、すなはち我らを來らんとする怒より救ひ出すイエスの、天より降りたまふを待ち望むことを告ぐればなり。］

○ポウロはシラスと倶にピリピに於て笞たれ、又牢に入れられた。

主の再臨を望み待てり。

第二章

2 ［二前に我らは汝らの知るごとく、ピリピにて苦難と侮辱とを受けたれど、我らの神に頼りて大なる紛争のうちに、憚らず神の福音を汝らに語れり。］

［大なる紛争］○徒十六～十七章、大なる紛争はユダヤ人の妨害。

4 ［四神に嘉せられて福音を委ねられたる者なれば、人を喜ばせんとせず、我らの心を鑒たまふ神を喜ばせ奉つらんとして語るなり。］

○ポウロの傳道は、其本源と根拠と目的とを全然神に置くものである。されどこれこそ眞の傳道であって、かくてこそまことに人を悦ばし得るに到るものである。

16 ［一六我らが異邦人に語りて救を得させんとするを拒み、神を悦ばせず、かつ萬民に逆ひ、かくして常に己が罪を充すなり。而して神の怒はかれらに臨みてその極に至れり。］

［罪を充すなり］○罪に罪をかさぬ

18 ［一八（我パウロは一度ならず再度までも）なんぢらに到らんと爲たれど、サタンに妨げられたり。］

○ポウロはピリピよりテサロニケ、ベレア、アテネを過ぎてコリントに来た。彼は途中よりテサロニケの信者を思ひ、引返さんとしたが、サタンに属するユダヤ人に妨げられて果さなかった。

第三章

○イエスの再臨を迎ふるにあたり、イエスに前にほこり得る所は、只我等信者お互ひあるのみ。我等の兄弟姉妹は、我等の寶である。十字架なくんば冠無し。十字架を負ふて我に従へ。汝等世にありてはなやみを受けん。其他、路（ルカ）一四26、羅（ロマ）五３。

2 ［二キリストの福音において神の役者（えきしや）たる我らの兄弟テモテを汝らに遣せり。これは汝らを堅うし、また信仰につきて勸め、］

［神の役者］○神の役者、神に偕にはたらく―神のためにはたらく

5 ［五この故に最早われ忍ぶこと能はず、試むる者の汝らを試みて、我らの勞の空しくならんことを恐れ、なんぢらの信仰を知らんとて人を遣せり。］

○サタンは信者のなやみの乗じて、其信仰を奪はんとす。なやみにあひて益信仰のつよめらるる者は幸なり。

内村先生のルツ子（長女、夭折）。

［試むる者］○サタン

6 ［六然るに今テモテ汝らより歸りて、汝らの信仰と愛とにつきて喜ばしき音信（おとづれ）を聞かせ、又なんぢら常に我らを懇（ねんご）ろに念（おも）ひ、我らに逢はんことを切に望み居るは、我らが汝らに逢はんことを望むに等しと告げたるによりて、］

○ポウロは、テモテよりテサロニケの信者の有様をききて、直に此書を認めたり。

7 ［七兄弟よ、われらは諸般（もろもろ）の苦難（くるしみ）と患難（なやみ）との中にも、汝らの信仰によりて慰安（なぐさめ）を得たり。］

○患難はキリスト信者に定まれることであると豫め告げた。之を恐るる者は信仰を捨てる外ないのである。キリスト者は、此世に喜び安逸を求めないのである。此世に於ては十字架を負ふ者である。キリストを模範としてキリストの足跡をふむべきである。

8 ［八汝等もし主に在りて堅く立たば我らは生くるなり。］

［生くる］○生くるはタスカルと云ふ意。なやみにあひ、いのちがけにはたらきたる力にあり。

11 ［一一願はくは我らの父なる神みづからと我らの主なるイエスと、我らを導きて汝らに到らせ給はんことを。］

○ポウロ其後第三回傳道の時、マケドニヤへ到れり（徒一九21）。

11～13 ［一一願はくは我らの父なる神みづからと我らの主なるイエスと、我らを導きて汝らに到らせ給はんことを。一二願はくは主、なんぢら相互の愛および凡ての人に對する愛を増し、かつ豐にして、我らが汝らを愛する如くならしめ、一三かくして汝らの心を堅うし、我らの主イエスの、凡ての聖徒と偕に來りたまふ時、われらの父なる神の前に潔くして責むべき所なからしめ給はんことを。］

○祈り

12 ［一二願はくは主、なんぢら相互の愛および凡ての人に對する愛を増し、かつ豐にして、我らが汝らを愛する如くならしめ、］

○汝等己れを愛するとも、何の報かあらん（太（マタ）五46）。

13 ［一三かくして汝らの心を堅うし、我らの主イエスの、凡ての聖徒と偕に來りたまふ時、われらの父なる神の前に

潔くして責むべき所なからしめ給はんことを。」

〇主の再臨は彼等の信仰の中心であった。彼等は此日を待ち、又おそれた。

第四章

3 ［三それ神の御旨は、なんぢらの潔（きよ）からんことにして、即ち淫行をつつしみ、］

［潔からんこと］

○三13にあたる。神の前にキヨキとは如何。姦淫を行はざること。何故に悪いか。之れ神の御心にそむく故である。信者は神の旨に従順なるべきである。これ世界を支配する最大の道徳である。而してイエスを常に仰ぎ見るによってのみなすことをうるのである（約六（ヨハ）、哥前（コリ）一五、太（マタ）二六）。

4 ［四各人おのが妻を得て、潔くかつ貴くし、］

○テサロニケの信者が、かかる罪を行ったと云ふのではない。警告である。訓戒である。而して戀愛小説、不潔の談話等は害がある。芝居、活動写真などにもよくないものがある。今や不法不義の靈は全世界にみちて、家庭の根底まで覆さんとして居る。

8 ［八この故に之を拒む者は人を拒むにあらず、汝らに聖靈を與へたまふ神を拒むなり。］

［神を拒むなり］○従順ならざるなり

13 ［一三兄弟よ、既に眠れる者のことに就きては、汝らの知らざるを好まず、希望（のぞみ）なき他の人のごとく歎かざらん爲なり。］

○信者の善行はすべて此希望の実現をメアテとして行はれたのである。主の再臨、最後の審判、聖徒の復活。初代の信者は此来世観がハッキリとして居たからこそ、世に勝ち、己にかち、今日の人々の到底及びがたき、

聖き愛の生涯を送り得たのである。彼等の希望は此世に無くて未来にあった。「もしキリストに由れる我等の望、ただ此世のみならば、すべての人の中にて我等は最も憐むべき者なり（哥前一五19）。

［希望なき］○希望なき世の

14 ［一四我らの信ずる如く、イエスもし死にて甦へり給ひしならば、神はイエスによりて眠に就きたる者を、］

○死後の再會。再會は必ず行はる。主の再臨の時に行はる。主に在りて死にし者先づ甦り、活きて在れる者は其まま化せられて天にのぼり、永遠に主と偕にあるのである。此再臨は何時か（撒後二3～12）。

15 ［一五われら主の言をもて汝らに言はん、我等のうち主の來りたまふ時に至るまで生きて存れる者は、既に眠れる者に決して先だたじ。］

○これポウロは聖靈によりて告げられたる言葉なり。孔子は云へり「未だ生を知らず。いずくんぞ死を知らん」（論語、先進六十一）と。されど我等は死後の生命を信ず。

［先だたじ］○先ニ天国ニ入ラジ

16 ［一六それ主は、號令と御使の長の聲と神のラッパと共に、みづから天より降り給はん。その時キリストにある死人まづ甦へり、］

○見よ、かれはくもに乗りて来る。すべての彼を見ん。彼を刺したる者も亦之を見るべし（黙一7）。

17 ［一七後に生きて存れる我らは、彼らと共に雲のうちに取り去られ、空中にて主を迎へ、斯くていつまでも主と偕に居るべし。］

［後に］○しかる後に

［居るべし］○我が居る所に、我に仕ふる者も亦居るべし（約ヨハ一二26）。

第五章

1 ［一兄弟よ、時と期とに就きては汝らに書きおくるに及ばず。］

○されば目をさまし居れ。汝等の主の来るは何れの日なるかを知らざればなり（太二四42）。

○其日其時を知る者は、只我が父のみ。天の使も知る者なし（太二四36）。

2 ［二汝らは主の日の盗人の夜きたるが如くに來ることを、自ら詳細に知ればなり。］

○ポウロ曾てテサロニケに於て、熱心に語りおきたればなり。大正十二年の震災の如し。

4 ［四されど兄弟よ、汝らは暗に居らざれば、盗人の來るごとく其の日なんぢらに追及くことなし。］

○我は世の光なり。我に從ふ者は暗き中を歩まず、生命の光を得べし（約八12）。汝等は世の光なり。地の塩なり。汝等の光を人の前にかがやかせ（太五14）。

○主の再臨は未信者にとりては災の日、かなしみの日。信者にとりては喜びの日、榮えの日なり。信ずる者は幸なり。されど幸なるだけ責任も亦重し。光の子ども、くやみの子ども、権力にあらず、富にあらず。

［其の日］○ホロビ

10 ［一〇主の我等のために死に給へるは、我等をして寤めをるとも眠りをるとも己と共に生くることを得しめん爲なり。］

［寤めをるとも］○いけるも

［眠りをるとも］○死ぬるも

16 ［一六常に喜べ、］

○神を愛する者には、凡ての事相働きて、益となるを我等は知る（羅八28）。患難にも喜びをなせり（羅五3）。

19 ［一九御靈を熄すな、］

○凡そ言を以て人の子に逆ふ者は赦されん。されど聖靈をけがす者は赦されじ（路一二10）。若し汝の兄弟罪を犯さば、行きて之を諫めよ（太一八15）。

21 ［二一凡てのこと試みて善きものを守り、］

［凡てのこと試みて］○凡てのことを考へて、其善きものを守り。

23 ［二三願はくは平和の神、みづから汝らを全く潔くし、汝らの靈と心と體とを全く守りて、我らの主イエス・キリストの來り給ふとき責むべき所なからしめ給はん事を。］

○ポウロは云ふ。人は靈と心と体の三部より成る者なれば、全く潔めらるるには、三者共にきよめられねばならぬと云ふ。人の肉体は萬のうち最も奇しく作られたものである（詩一三九14）。

心は希臘語のサイケー（プシュケー）。英語のマインド又はソール。智情意のあるところである。善用すればニュートン（英国科学者1642-1727）、カント（ドイツ哲学者1724-1804）たり。悪用すれば、日本の政治家、実業家の如くなる故に、之を廣め強め潔めることは、何人にとっても重要な問題である。心の中に靈がある。

ユダヤ人は、体は庭、心は聖所、靈は至聖所にたとへた。（来九章）肉は外の物質界に接し、靈は内の霊界に接す。心は中間にあって、之を感得し、之を自覺す。人は神と物との間に介在するものである。其足に地に接すれども、其頭は天に向ふ。而して普通の場合、靈は死せるか眠って居る。靈は眞の神の靈に接してはじ

めて、目がさむるのである。人は靈（神の）に接せずとも、大政治家、大芸術家、大実業家（所謂）となり得るであらう。ナポレオン（フランス軍人：政治家 1769-1821）、ニイチェ（ドイツ哲学者 1844-1900）、伊藤（伊藤博文：政治家 1841-1909 山口県生）、大隈（大隈重信：政治家：教育者 1838-1922 佐賀県生）。不信者でも偉人たり得る。併し靈にめざめて新宇宙を発見するのである。コロンブス（探検家 1451-1506 イタリア：ジェノバ生）のアメリカ発見の如くである。塵につきし地は天に向ふのである。救は靈にはじまり、心をきよめ体をきよめるにいたるのである。神の靈は人の靈の戸をたたきて降し給ひ、其ねむれる靈をさまし給ふのである。酒をのむものは第一に其靈はいよいよ深きねむりに陥る。生涯或は遂にめざむる時がなくなるのである。次に其心も麻痺する。次に体も麻痺するのである。きままにのませれば其まま死んでしまふのである。幸にして手も口も動かずなりて、飲まんと欲しても飲む能はざるにいたるのである。ポウロは「酒に醉ふこと勿れ。之をなすは放蕩なり。宜しくみたまに満さるべし。（弗五18）と云った。福音に於ては、人の罪が肉体より心に、心より靈に及べるに反し、靈より心に、心より体に救が及びて、ここに永生が与へられると云ふのである。靈の復活が肉の復活に終るのである。イエスは無限の聖靈を其靈に宿し給へるが故に、肉体の死は不可能であったのである。信者は日々の生涯に於て之を実験し、幾分なりとも神に肖たるものとなり、生命の中心に神の靈をうけて、生命全部の復活を得んと欲するのである。肉の事を念ふは死なり。靈の事を念ふは生なり、平安なり。肉の事を思ひて靈も死し、靈の事を念ひて靈も生きるのである。